

素材採取家の 異世界旅行記

MATERIAL COLLECTOR'S ANOTHER WORLD TRAVELS

3



木乃子増緒

KINOKO MASUO



プロライト

見た目は絶世の美女だが、
中身はおっさんという
残念エルフ。

タケル

ひょんなことから
異世界で「素材採取家」
となった本作の主人公。
食べることに
お風呂が大好き。

ワイムス

ギルド「エウロバ」に
所属する冒険者ランクB
の素材採取家。なぜか
タケルをライバル視
している。

プニさん

アラタムニはウルクス
古代馬という
偉い馬の神様。
見た目は美女でも、
やっぱり馬。
よく食べる。

アーさん

プロライトのお兄さん。
本名は「オーケシュト
アーゼンシール」と
長い。背が小さい。

ビー

タケルの相棒の
子ドラゴン。
タケルとカニが
大好き。

レインボーシーブ

七色の毛を纏う動物。
むーむー鳴く。
すばしっこいため
捕まえるのは困難。

主な登場人物

＋　＋　＋　＋　＋

こんにちは！　俺の名前は神城かみしろタケル。

不思議な異世界「マデウス」に転生して、元気にやっている素材採取家だよ！　素材採取家っていうのは、薬草や野草、鉱石にモンスターのうんこなど、様々な材料や原料を探す職業なんだ。

この世界に転生してきたとき、神様っぽいやつに膨大な魔力とそれを操る力をもらったんだけど、これがとっても便利で、ちよつとずるいんじゃないかってくらい活用しまくって生活しているわけだ！　きゃっほーい！

……いや、まてまて。誰だこれ。俺はこんな明るい爽さわやかキャラじゃない。

本当の俺は、明日から本気を出すって誓って、朝起きたら眠くて昼過ぎまでごろごろして、やつぱり明日から本気を出すと思いなおすようなものぐさなんだ。はあ。

いやいや、落ち込んでいる場合じゃない。そんなことより、ちよつと今、大変なことになっているんですよ。

俺が滞在しているベルカィムを統治するルセウヴァッハ伯爵はくしやくに頼まれ、奥方様の謎の病気を治す

ことになったんだけど、その過程でルセウヴァツハ領の隣にあるフィジアン領ヴァノーネ地方アシュス村に行ったんだ。うん、舌を噛みそうな名前だよな。俺も何回か舌を噛んだ。

それでまあ、仲間であるドラゴニュートのクレイストンと相棒である可愛いドラゴンのビーの活躍もあり、なんやかんやあれやそれやとあって、奥方様の病気は快方へ向かうことに。

それは良かったんだけど、さっき言った大変なことっていうのは——どうしてか俺たちに新しい仲間が増えたのです。

とんでもなく美しい女性の姿に変身する、馬の神様が。

1 急転・邂逅相遇

「こ、こ……これは……！」

「内緒ですよ、ここだけの話にしてくださいね？」

「いやしかし、てめえ……こりや……」

「わあかってますって、ヤバイ代物だっことは。ですから、極秘裏に、ね？」

「へへっ……こんだけの代物を俺に任すたあ……」

「信頼している証ですよ……」

「へへへっ……」

「ふひひ……」

ここは、ベルカイム商業区にあるペンドラスス工房。

工房の入り口には、燦然と輝く黄金色の獅子のエンブレム。店先には、噂を聞きつけた大勢の冒険者が詰めかけ、工房の職人たちはその対応に追われている。

そんな猫の手も借りたい状況の中、俺とグルサス親方は応接室の隅で極秘談合。

なぜこのようなことになっているのかというと。

この工房の親方、ドワーフの武器鍛冶職人グルサス・ペンドラススは、この度アルツェリオ王国の王都で開催された全国武器鍛冶武具品評会なるものに出場。俺がリュハイ鉱山で採取した最高の状態のイルドラ石とイルドライトを惜しみなく使って美しいロングソードを造り上げ、武器・剣部門の最優秀賞作品に選ばれた。

美しく輝く青と白銀の剣は王や専門家を大いに魅了し、「覇者の業雷」と名付けて国宝とするとかなんとか、大事になってしまったらしい。わあ格好いいお名前、と吹き出さなかった自分を褒めてやりたい。いや確かに雷っぽいイナズマ模様が入っていたけどさ。誰だ名付けたヤツ。

そんなこんなで、ペンドラスス工房はアルツェリオ王家のお墨付きである黄金獅子のエンブレムをいただき、名実ともに国内最高の武器鍛冶工房として認められたというわけである。

しかしゲルサス親方は相変わらずのようで、気が乗らなければ武器を造らない。妥協をしない。貴族から次々舞い込む見せかけだけの豪奢な剣造りは、決して受けないというスタンス。

そんな親方に、俺は採取用のハサミを造らせようとしているわけで、ちよっと申し訳なく思っていた。これでも遠慮しいんですよ。

だが、ベルカイムに帰還しても工房を訪れない俺に業を煮やした親方は、ギルドで美味しいほうじ茶の淹れ方講座を開いていた俺の腕を掴んで、工房まで拉致した。

開口一番「なにチンタラしてやがる！」と怒声を浴びせられたのは、目が覚める思いでした。

「親方だからバラすけどさ、このミスリル魔鉱石も魔素水も古代竜にもらったんだ」

「こうして実際に手にするまで……こんな恐ろしいモンがこの世にあるだなんて信じられなかった。なんでおめえ、古代竜なんかと知り合った。ありや、世界を守る神様だぞ？」

それは成り行きってやつです。

「まさか、そのチビっこいドラゴン……」

「ビュー？」

「まあまあまあ、そういう細かいことはどうだっていいじゃないか。で、このミスリル魔鉱石と、魔素水と、トランゴクラブの甲羅と、イルドライトを使って、ハサミは造れそうか？」

鞆から取り出した輝く鉱石の数々。そしてアダマンタイト並みに硬い、青い蟹の甲羅。

親方は難しそうな顔をしていたが、大きな鼻がひくついているのがわかる。未知の鉱石を渡されたら試したくなるのが、職人の本能。組んでいた腕を外して、怪しく輝くミスリル魔鉱石を手取る。そしてニヤける顔。

「こんなんでもねえもん……試さねえだなんて俺の名前が廃らあ。もしかしたら鍛冶職人の憧れでもある……神器が造れるかもしれねえじゃねえか」

「あ、そういうトンデモ作品はいらないです」

持っていることで命を狙われるハサミとか、勘弁してくれ。

「任せるタケル！俺が一世一代の、これ以上のモンは他に絶対にねえってハサミを造り上げてみせるからな!!」

一流の職人が一流の材料で造る一流のハサミ。楽しみ以外の何物でもないが、少し不安が残る。アルツェリオ王国一腕の良い武器鍛冶職人に、妥協という言葉は通じないだろうから。

「腕が鳴るぜええー!!!」

親方の気合いの入ったデカイ声は、狭い応接室を震わせた。

それから俺は手の型を取ってもらい、その日の極秘談合は無事に終了。親方はハサミを造るすべての工程を一人でやりきると言っていたので、一月以上はハサミに掛かりきりになるに違いない。国が認める最高の職人を採取用のハサミに専念させるなんて、親方の腕を必要としている人は、ふざけんじゃないと怒るだろう。でも、俺は急いでいないし、出来上がりはいつでもいいって一

応遠慮したからな。でもちよつと申し訳ないので、折を見てじゃがバタ醤油しうゆでも持つていつてあげよう。

茹でたじゃがいもを思い浮かべていると、声がかかった。

「終わりましたか？」

「ああ、出来上がりが楽しみですだ」

「それはようございますね」

工房の裏口から出た俺を待っていたのは、白銀の髪に紫紺色しこんの瞳の美女。

優しくふんわりと微笑むその姿は、道行く誰をも振り返らせる。背が高くてすらりとしていて、肌は白くて滑らかなめ。元氣満点のブロライトとはまた違った、清楚せいそな女性……

「急ぐように鞭むちを打ってやりますか？ ひひん」

……黙っていれば。

ガレウス湖を守っていた聖なる獣であるホーヴアルプニル。略してプニさん。

魔素停滞の影響で力を失い、大地を守護することができなくなった神様。湖を守るために自分を犠牲にして石にまでなったのに、それでも守りきれず湖は汚されてしまった。

俺が湖に落っこちたことでなんでだか魔素停滞が解消され、毒素がなくなった湖には力が戻り、プニさんも元氣になった。

元氣になったのは宜しいのだが、世界を旅したいと俺に付いてきたわけ。

「鞭は打ちません。好きなように造つてくれればそれでいい」

「そうですか。お前がそう言うのなら、楽しみに待ちましょう」

穏やかな笑顔は本当に綺麗きれいなんだけど、コレの正体は馬だからな。しかも、でっかいクレイを易々と運べるくらいでつかい天馬てんま。大きさは自在に変えられるけど、基本的に普通の馬より一回りも二回りも大きいサイズ。

神様つてもっと神々しくて畏れ多くて近寄るのすら滅相めつそうもない、っていうイメージだったんだけどなあ。

「ささ、それでは屋台で、じゃがばたそうゆーを食べましょう」

「さつきも食ったろ？」

「人の子はよく言うではないですか。それは、それ。これは、これ。と」

コレ、本当にありがたい神様なのかな……

「ピュピュイ！ ピューイッ！」

「あらあらまあまあ、ヴォルディアスの仔はお腹がいっぱいなのかしらね？」

「ピュッ!? ピュイイ！ ピューイ！」

「わたくしは食べますよ？ さつき食べたのは気のせいです。ぶるる」

美女とちびっこドラゴンのガチ喧嘩げんかなんて、しようもなくて見たくない。

神様であるプニさんと神様候補のビーは、なんでだか犬猿の仲。ビーのほうがまともに見えるの

は、プニさんがものすごくズレているからだろう。賑やかなベルカイルに来て、相当ウカレていたからな。アレ見せろコレを買えと、三日くらいはうるさかった。なかでも、じゃがバター醬油が気に入ったらしい。

俺も小腹が空いたところだし、ギルドでクレイを拾って屋台散策でもいいかな。そんなことを考えながら、美女に急かされ職人街を出たらば――

「お前か！ 最低ランクの素材採取家ってのは!!」

誰かがなんか叫んでいた。

最低ランクの素材採取家って俺以外にもいるのかー。そうかー。頑張つてー。

「おいっ！ 聞いているのか!」

呼んでいますよ誰かさん。え？ 俺？ いやいや俺のわけないですよー。やだなー。

「ふざけるなっ!」

強引に腕を取られたが、無理やり振り向かすことなどできるわけがない。俺、でかいから。

「くっそ！ なんでこんな、でかいんだ!!」

俺の腕を掴んでわめくのは、俺の胸より下にある茶色い頭人間の青年だった。

人の顔を覚えるのは得意。少しでも交流があれば、以前どんな会話をしたか多少なりとも記憶しているのだが、彼に関する記憶は一切なかった。つまり、見ず知らずの他人。

俺より先にプニさんが口を開く。

「どなたですか？ この、小煩い猿は」

「えっ、猿？ 獣人だったの？ 俺、てっきり人間だと」

「ピューイー」

人間そっくりの猿獣人もいるのか、なんて感心していたら青年の顔が真っ赤になった。

「うるさいうるさいっ！ おい、お前っ！ 俺の縄張りで勝手なことしやがって!」

「獣人ってマーキングするの!? それは知らなかった」

「まーきんぐとは何ですか?」

「自分の縄張りを主張するために、アチコチにおしつ……」

「いい加減にしろーっ!」

青年が怒鳴った。

賑やかな中央通りだから、たくさんの視線を独り占め。

なんでこんなに怒るんだ？　そもそもなんで俺が怒られる？　彼の縄張りなんて知らないし、彼自身を知らない。

「ええと猿さん、落ち着いて」

「俺は猿じゃねえっ！　リンド・ワイムスだ！　エウロパに所属しているんなら、俺の名前くらい知ってんだろっ！」

知っていないといけないうくらい有名な人なのか？　いやでも全く知らない。これっぽっちも知らない。そもそも他の冒険者に一切興味が無い。失礼な真似をしてくるヤツらの顔は覚えてるが、猿……彼の名前にも聞き覚えがない。どうしよう。

「冒険者ランクB！　の素材採取専門家ってのは、俺のことだ！」

あーあーあーあーはいはいはい、わかったわかった!!

冒険者ランクBの素材採取専門家がエウロパに所属しているとは聞いていたが、この青年なのか。俺よりは年上だろうけど、きゃんきゃん吼える様を見てると度量の大きい男とは到底思えない。

お猿獣人ではなく、れっきとした人間の冒険者であるリンド・ワイムス氏。

推定年齢二十代半ば。身長……わからん。ちっさい。きゃんきゃんよく吼えるので猿というより仔犬に近い。ここで余計なことを口にする、また面倒なことになるだろうから黙っておこう。

「新参者が我が物顔で俺の縄張りを荒らしているって聞いて来てみれば、ランクFだと？　最低ランクのヒヨっ子が生意気に！」

なんだかぶりぶりしている理由を、彼が説明する前に俺が推理してみよう。

ベルカイルで唯一のランクB素材採取家であった彼。依頼をほぼ独占受注していたのだろう。そんな井の中の蛙状態だったところに、俺という超新星——ちよつと言いつぎか——が現れた、と。縄張りを荒らしているつもりは全くなかった。そもそもエウロパの受付主任であるグリットにも確認したんだ。これと言って決まった採取場所はあるのかと。

チームで管理しているようなところに、勝手に入って勝手に採取したら問題になる、っていうかクソ面倒なことになる。そういう場所があるなら前もって知っておきたいからだ。

しかしグリットは笑って言った。そんなことしているヤツはいない。私有地ならともかく、ルセウヴァッハ領はすべて領主の所有物だ。独占しているヤツがいたら、逆に報告してほしいとまで言っていた。

そんなわけで、俺は安心して採取をした。と、いつでも街道近くや地図に細かく記載されているような人気箇所は避け、モンスターが出てくる奥地へ赴いて採取していたのだが——

「どんなあくどい手を使ったのか知らないが、俺より評判がいいってのが許せねえ」

初対面の人間相手にきゃんきゃん吼える様が、不人気の原因じゃないかしら。

「お前、クレイストンさんの手を借りて採取してんだろ」

「はあ」

「そりゃ、栄誉の竜王が付いていやがんだもん！　どんな危険地帯にだって行けるだろうよ！」

「まあ」

「しかし解^げせねえのが、俺を指名していたヤツらが、根こそぎお前のところに行っちまったってことだ！」

そんなん知らんがな。

俺は頼まれた仕事には真摯^{しんし}に向き合い、顧客を満足させるために最高の品を届けるよう努力しているだけだ。

そもそもクレイとチームを組む前から採取はしていた。ビーの力もあるが、俺自身だってまあまあ頑張っていた。それを知らないのかね。知らないんだろうな。

「へんつ！ どうせ、どこから盗んだ品を横流ししていやがるんだろうよ！」

あらあ。

とんだ言いがかり。

やだどうしよう。

同じ素材採取家だというから同業者としてよしなに、なんて考えていたのが馬鹿みたいだ。嫌だなあ。採取家が皆こんな単細胞^{たんせうぼう}だと思われたら。

「タケル、お前の不愉快だと思いう気持ちは重々承知しています」

「わかつてくれるか、プニさん」

「少し、殺しましょう」

やめなさい。

爽やかな笑顔で拳^{こぶし}を握り締めるプニさんを落ち着かせ、さてどうするかと思案。

ランクBにしては性格がヒン曲^{まが}がっているのが気になるな。冒険者のランクは上がるごとに経験を積み、精神が研ぎ澄まされ、ちょっとやそつとでは喧嘩^{けんか}なんてしなくなるものなのに。人によるが。

弱いヤツほどよく吼えるとは言ったもの。これはアレか。彼、強い誰かに付いて便乗^{べんじよう}ランクアップしただけで実力は伴っていないという。

「えーと、誰さんだっけ」

「ランクB冒険者の、リンド・ワイムスだ!!」

「そうそう、ワイムス君。そのワイムス君は何がしたいわけ？」

「えっ!? えっと、そ、それは」

「この広大なルセウヴァッハ領はルセウヴァッハ伯爵の所有物であつて、君の私有地でも縄張りでもなんでもない。暗黙の了解も知ったことじゃない。それなのに、君は縄張りがどうのと主張するしかも俺の仕事に嫉妬^{しつと}して、盗品だの言いがかり。それじゃあ聞けど、盗品だった場合、俺はどこからどうやって品物を盗んでるのか教えてくれないかな」

なるべく穏やかに微笑んで、ゆっくりと話をした。

周りで知らん顔をしながらも聞き耳を立てているヤツらも無言で頷^{うなづ}いている。言っておくけど、

この群集の中には俺の顔見知りがいちほらいるんだからな。俺のことを一人前の冒険者だと認識している人たちが。彼らの目の前で俺が諸々と従ったり、同じレベルでやり合ったりしてみる。俺の信用はダダ下がりだ。

「依頼者が俺を選ぶのは、俺が決して仕事に妥協をしないからだ。頼まれたものはランクFの野草でもより良い状態のものを厳選する。枯れたり折れたりした半端なものは決して納品しない。顧客は俺を信用してくれる。だから俺はその信用に精一杯応えるために奔走する。仕方がないと諦めて開き直るなんてとんでもない。君が依頼主だったら、どちらの採取家に仕事を頼むんだ？ それはできないと断る冒険者か？ 違うだろう？ 期待に立てくれる冒険者だろう？」

彼の腕前は知らないが、こんな言いがかりをつけてくるようでは高が知れている。顧客に向き合い真摯に対応していれば、客は離れていかないものだ。いくら隣の芝生が青くても、情が芽生えれば気にならなくなる。営業担当が気に入ってもらえれば、新商品の宣伝にも耳を傾けてくれるのだから。

神城クン、営業っていうのはね、会社じゃないの。看板じゃないのよ？
人なの。

人が、人にものを売って、人が、人を気に入って買ってくれるのよ。
人を舐めたり軽んじたりしたらそこでお終い。人は人を見ているんだから。

ついつい前世の先輩を思い出してしまった。厳しくとも温かみのある先輩だった。むちつとしたタイトスカートから伸びるすらりとした脚が素晴らしくて、お近づきになれたらなとか何とか思ったこともあったり……

「ああもう、やつぱり揉めている！」

先輩のおみ脚を思い出している場合ではなかった。

騒ぎを聞きつけてやってきたのは、エウロパ受付主任、キツネ獣人のグリット。銀フレームの丸眼鏡を煩わしそうに直している。あれは機嫌が悪そうだ。

「ワイムスさん、私言いましたよね？ 冒険者同士での揉め事はご法度ですよ！」

「でもよ！ 俺のシマを荒らしやがった新参者に礼儀ってモンを！」

「誰よりも礼儀正しいタケルさんに何を言っているんですか！ ほら、ここは目立ちますからギルドに行きますよ！」

「イッテェ!! なにしやがんだ！」

ワイムスの耳をぐいっと摘み、説教をする光景はマンガみたい。耳を摘まれて引つ張られる人、初めて見た。

「ご面倒をかけますが、タケルさんも一緒に来ていただけますか？」

グリットは不機嫌ながらも苦笑いし、申し訳なさそうに言う。

ほんと面倒なんだけど、恨まれたままっていうのも気分が悪い。では、懇意にしているグリットの顔を立てるとしますか。

ところで、ベルカイムに来てそろそろ四ヶ月。新参者っていつまで言われるのだろうか。

＋＋＋＋＋

ギルドにやってきた俺は、酒場で若い冒険者たちに囲まれて萎縮しているクレイに手を振り、奥の面談室へ向かった。またあの暇そうな巨人のおっさんこと、ギルドマスターがいるのかと思いきや、おっさんは所用で他の町に出向いているのだとか。働いていたんだ、あのおっさん。

面倒そうな話の場に面倒そうな人を連れていくのも面倒だったので、プニさんはクレイに任せた。室内には、グリット、ワイムス、俺の三人。皆席についたところで、グリットが口を開く。

「さて、及ばずながら私が仲立ちさせていただきます。宜しいですね？」

お茶を持ってきてくれたアリアンナのウサ耳の動きに癒されながら、話は強引にはじまった。

グリットによると、数ヶ月前からワイムス氏より一方的な苦情が出ていたらしい。ベルカイムで唯一のランクB冒険者の素材採取専門家である自分の仕事が減ってしまった、指名依頼が半分以上になってしまった、どうということだと。

問われたところでグリット氏は、他の冒険者の情報は決して流さない。口の堅さで言えば、事務主任のウェイドよりも堅いと評判なのだ。なので、ワイムス氏がいくらグリットに聞いても埒が明かなかった。

そこで彼は、指名依頼を解消してしまった顧客に直接聞くことにした。というよりたぶん脅したんじゃないかな。そして聞き出したのが、新参者のランクF冒険者である素材採取専門家。

底辺ランクの分際で自分の顧客を根こそぎ取っていくだと？ とまあ憤慨したわけだ。

グリットが珍しく恐ろしい声で言った。

「ではワイムスさん、タケルさんに謝罪をしてください」

「なんでだ！」

「騒ぎを聞いていた者に聞きました。貴方が一方的にタケルさんに言いがかりをつけていたんですってね」

「チッ！ 告げ口かよ」

「なんですか、その口の利き方は！」

グリットさんまじ怖い。

だが、叱ってくれる人がいるのはありがたいことなのだ。叱る側は過ちを正してほしいと願っているからこそ言う。興味のない人間なら放置しておけばいい。勝手に自滅してくれるのだから。

「貴方、言われたくないんでしょう？ 便乗ランクアップだと」

「そんなこと言ったヤツ、俺がぶちのめしてやる！」

「戦闘能力皆無な貴方が、何を世迷言^{よまいごころ}を」

二十代半ばほどでランクBというのは、運だけではたどり着けない。多少なりとも実力はあるはずだ。しかし、この性格では疑われても無理もない。俺ですら疑ったんだ。高ランク冒険者に便乗してランクアップしたに違いないと。

ともかく、ベルカイムにはもう少し滞在する予定だし、居心地の好い町のままでいてもらいたい。なので、このまま勝手にライバル視されるのは困るな。

では、俺のターンということだ。

「はいグリットさん」

「はい、なんでしょう」

「一言、言ってもいいですか」

「もちろんです。タケルさんの言い分もあるでしょうから」

それでは反論いきますか。

アリアンナが淹れてくれたちよつと……ものすごく苦いそば茶を飲んでから開始。

「で？」

「え？」

「いや、だから、で？ 君の縄張りだかなんだかで、俺が君の仕事を奪ったと思っっているわけだ

ろ？ はい、奪ったつもりはありません。俺は俺なりに仕事をしているだけです。以上。終わり」

「えっ？ ちよつ、いやちよつと待ってっ！」

さて終わったと席を立つと、ワイムスが慌てて俺を制止する。

「な、なんでランクFのくせして……指名依頼が多いんだよ」

ランクFのくせして、って言葉に少々腹が立つが、ここは俺が大人になってあげよう。

彼は世渡りが上手なほうではなさそうだし、きっと方々で恨みを買っているんじゃないだろうか。俺は前世でいろいろと経験させてもらっているから、喧嘩^{けんか}を売られても冷静に対処できる。教えてくれる人がいたから、学ぶことができたんだ。

では、大人の対応というのを見せてやろう。

「ええとですね、まず俺がランクFのままなのは理由があるんだよ」

「そうです。ギルドは再三にわたって、タケルさんにランクアップ試験を受けろと進言しているんです。タケルさんの実力はランクFなんてとんでもないんですよ」

グリットが援護射撃。

ランクアップすることに問題はないのだが、ランクが上がってしまうと主な依頼^{クエスツ}は、モンスター狩りや鉱石採取になる。ランクB冒険者でも、ランクFの地味依頼を受けることはできるが、今1000レイブで済んでいる依頼にランクB冒険者の指名料が加算されてしまい、依頼料金は1500にも2000にも跳ね上がってしまう。

なんせ指名料やら手数料やらまで支払う余裕はない、という依頼者が大半だからな。最^{ひい}屑^きにして
くれている顧客は皆顔見知りでいいヤツばかりなんだよ。そういう優しい人たちを拒んでまでラン
クアップすることに、価値はあるのかなど。個人的に依頼主と直接交渉してやり取りすればいいか
もしれないが、それはギルドから禁止されているし。

それに、俺の仕事は他の冒険者とは違う。依頼された品はより良いものを探し、最低ランクの薬
草一つでも葉の色や大きさ、状態まで考えて採取をしている。顧客を満足させることに関しては自
信があるんだ。

調査^{チョウサ}が優秀だからって、それを選んで採取するのは俺の判断。採取の仕方だって多種多様。無造
作に切って折って鞆^{タヌ}に詰めているんじゃないんだ。採取の仕方は図書館の蔵書をいくつも読んで勉
強した。

それに最近は、魔法に頼らずとも、薬草や野草が生息していそうな場所がわかるようになった。
アリクイのうんこだって任せろ。

何百何千もの採取をしてきたんだ。学習しないわけがないだろう？

俺だって少しは採取専門家として胸を張りたいんだから。

「この際ランクとか関係ないよな？ 俺は地味依頼を消化しているだけ」

「それじゃあなんで、俺の客がお前に移るんだ」

「そんなこと考えなくてもわかるだろ。さつきも言ったし」

そっちが客をないがしろにしたんだよ。

客が、仕方なく仕事をこなす採取家より、誠意を持って仕事をする採取家を選んだだけ。

「うっぐぐぐ……わっかんねえ、わっかんねーよ！ なんで、俺が、ランクBの俺が！」

わかりやすく説明したつもりなんだがなあ。

ワイムスはまだまだ納得できないようだ。自分が正しいと思っっている人間ほど、間違いを絶対に
認めない。

以前、領主の娘を論したように優しくするつもりはねーぞ？ 俺は男には厳しいんだ。

「そんじゃ、アンタはどうしたいんだ。俺はこれから仕事を辞めないし、ベルカウムで世話に
なる」

「当たり前です。ダンゼライのシリウスなんかに移らないでください」

そう言ってグリットが俺を見る。その、ルセウヴァッハ領の隣にあるダンゼライという町も
気になってはいるのだけど。

そこへ、ワイムスが一言。

「採取で………そうだ、採取で勝負だ！」

「えっ、やだ、めんどくさい」

「は!？」

反射的に拒否してしまったが、いやそもそもなんで採取勝負なんて熱血なことやらなきゃいかん

のだい。採取で勝負して白黒つけてそれでどうするんだよ。勝ってドヤるだけだろ？ 俺の生活は全く何も変わらない。たとえ俺が負けたとしても、俺を信用してくれている顧客は離れないと思う。

「勝負して、どっちがより優秀な採取専門家か、決着をつけ……」

「いやだからね、決着つけてどうしましょう？」

「うっ、それは、えっと、だから」

ようしわかった、受けて立つ！ って言えるのは熱血主人公だけなんだよ。俺は主人公じゃなくていい。世界の端っこで細々と生きる健気なモブAで十分なんだ。

「いいですね！ それ!!」

あれっ？

「確かに、目に見える結果を作れば良いのです！」

ヒゲをひくひくさせちゃって、グリットが目を輝かせて立ち上がった。

おかしいな。何言っているんですか、と激怒するのを待っていたんだけど。

「タケルさん、こうなったら、持てる技術のすべてをワイムスに叩きつけてやりなさい！」

「えー」

「そうやっていつまでも逃げていると、ワイムスはしつこいですよ？ ほんとこの人、しつこいですよ？」

それでグリットは、腰に両手を当て、高らかに宣言してしまった。

「ワイムスさんとタケルさんの素材採取勝負、私が責任を持って立ち会いましょう！」

なんで、面倒なことになりたくないっていつも言ってるのに、さらに面倒なことになるんだ。

2 歓喜・臨戦態勢

素材採取専門家による、ギルド公認の素材採取競争が開催される。

ベルカーム唯一のランクB素材採取専門家であるリンド・ワイムスと、最近頭角を現したランクF素材採取専門家であるタケル。

両名が己の意地とプライドを懸けた熱きバトルを――

「したくない……」

屋台村の一角にあるイトインスペースで、俺は机に突っ伏して大いに拗ねていた。

ギルド公認の素材採取競争だなんて、この俺がホイホイ了解すると思うか？ エンジンかかったグリットにやめてよと言ってても一切聞く耳を持ってくれず、話は熊獣人のウェイドに飛び火そりや面白そうじゃねえかと乗ってしまった熊さんが、「ギルド公認」としてしまったのだ。これに喜ぶギルド職員一同。久しぶりのお祭りだと万歳していた。

こうなってしまったら、頑なに拒んだところで批判を受けるのは俺。

素材採取競争ってそもそも何だよ。借り物競争みたいなものか？ 競って勝敗決めてどうすんのほんとに。

「今後も難癖をつけてくるであろうから、良い機会ではないか」

すっかり気に入ったじゃがバタ醤油を井に山盛りよそったクレイが、完全に他人事として言うてる。俺の面倒くさがりな性格を知っていてこれだからな。□元笑ってるじゃないか。くそ。

「お前が気に入らぬのでしたら、わたくしが少し殺しますよ？」

「少しがどのくらいなのか気になるが、そこまでのことじゃない」

「人の子はつまらぬことで諍いをするのですね」

プニさんの言う通り、そうですね。

ほんと、つまらないことだよ。

ワイムスに素材採取家としての確固たるプライドがあったなら、こんなことにはならなかった。

他に活躍している人がいるな、ようしボクも負けずに頑張ろう、えいえいつ、つてなっていれば平和だったのに。

すでに井をカラにしたクレイから疑問の声が上がる。

「勝負というが、どのように勝負をするのだ。お前なら大抵のものは手に入るであろう？」

「それなんだよな……」

++ ++ ++

時をさかのぼり、ギルドにて。

勝負となった段階で、それじゃあ何を採用するのかと。

俺はあくまでもランクF、相手はランクB。ランクFの俺でも採取してよい素材でなくては勝負にならない。

俺には優秀な先生方のご支援がありますから、何でも来いなのだが。

「ランクBの月夜草でどうだ！」

ワイムスが高々と提案したが、俺とグリットは顔を見合わせて苦笑い。

「それがいいなら、それでいいけど」

「タケルさんの採取した月夜草を見たとありますか？ 彼の採取した月夜草の薬効成分が優れているおかげで、ベルカイム産の高位回復薬は最高品質に認定されたんですよ」

グリットの説明を聞いたワイムスの顔が青くなった。

「こそ、それじゃあ、アレだ！ ハンマーアクリクイの糞！ ランクCだぞ！」

俺もグリットも目を閉じ、そしてため息。

「……………ハンマーアクリクイの糞を三日で十個採取したタケルさんにそれを言いますか」

「うんこ採取得意です」

さすがに在庫は保管していないが、何かと注文が絶えないうんこ採取は得意になっていた。今では探査をしなくても在処がわかるくらいに。嬉しくない。

「それじゃあミスリル鉱石!」

「タケルさんはランクFですよ?」

「鉱石採取はランクDから」

探してこいと言われれば探すことは容易いが、それはグリットが止めた。あくまでもギルド公認の勝負なので、ランクによる採取の制限は守らなくてはならないと。

グリットは勝負などしなくても勝敗がわかっているのだろうし、俺も負ける気はしない。だが、わざわざこの場を設けたのは、ワイムスに現実を知らしめるためだ。

それなのにワイムスときたら、グリットの優しさだとどうして気づかないかな。なんでそんなに余裕がないんだ。

結局、採取対象はギルドが考えることになり、ひとまず解散することになった。

+++++

そして、再び屋台村。

何を採取するのであれ俺は負けない。プライドとかそういう問題じゃなくて、単純に俺が有利だからだ。

異能としてもらった探査能力は優秀すぎるほど優秀。たとえるなら、今日からお前は勇者です、世界を恐怖に陥れようとしている悪魔の居場所を探しなさい、はいわかりました見つけたよ、って言えるくらいなのだ。なんだそれ、って感じにすごいのだ。

諸々の恩恵で生活できているからこそ、必要最低限の仕事にしている。欲は絶対に出さない。出る杭は打たれるものだ。だが、頼られたら応えたいと思うし、喜ばせたいと思う。広く浅くではなく、狭く深く。

それを気に食わないからやめろと言われたら、誰だって反発する。

「勝負をするのならば、俺は同行できぬのか?」

「ピュッ!?」

「クレイはそうなるのかな。ビーはどうなるかわからんが、駄目って言われるかもしれない」

「ピュイ! ピュイイ!!」

「仕方がないだろ? 相手だって単身で挑むんだから。こっちにドラゴンがいると知ったら、不公平だとかなんだとか嘯みついてくるに違いない」

ビーと出逢う前は一人で採取をしていたのだから、何とかなるだろう。

必死にすがりついてくるビーを宥め、意気揚々と豊かな胸を張るプニさんを見る。

「わたくしは必要ですよ。なんせわたくし、馬、ですから？」

「馬も駄目」

「ええっ」

「全部同じ条件での勝負になると思う。もしも相手が馬車とか持っていたら話は別だが、たぶん徒歩じゃないかな」

「馬も連れずに何処へ行くと申すのですか？ う、馬は必要でしょう？」

馬のこととなると人が変わるプニさんも置いておいて。というか、プニさんを使ったら絶対に楽勝。なんせ神様だし。

ところで、俺自身はどこまで力を抑えればいいのだろうか。俺の能力はさすがすぎるので、抑えたところで公平にならないかもしれないが、勝負は勝負だからなあ。

いや、待てよ、そもそも魔法全面禁止だったらどうしよう。

探査や調査をするなど言われたらさすがに困るな……採取したことの無い未知なるものだったら、どこに行けばいいのかすらわからない。お題が決まったら図書館に走るか。

「ピュイイ……」

「古代竜の鱗を持つてこいとかはさすがに言わないだろうよ。一日か二日でこなせるものに決まっているって」

「ピュイ！ ピュイイ！ ピュピュ、ピュイイ！」

「いや、お前の鱗はいらんから。話を聞きなさい」

「神獣の鱗はどうでしょう」

「ないから」

「ドラゴニュートの抜け牙はどうだ」

「ないから」

そんなこんなで大量のじゃがバター醬油を消費しながら、チーム「蒼黒の団」はお題について話し合った。

クレイもビーもプニさんも俺の異常な力のことには知っている。それに、俺のことを信じてくれている。たとえば俺が勝負に負けても、この関係が揺らぐことはない。でも、面倒だから不戦敗で、つて言ったらクレイが怒るだろうからそれはナシにする。

そうして数日後、ギルドで大々的な発表が成された。

＋　＋　＋　＋　＋

ぷっ。ぷく。ぷー、ぷっ。ぷっ。ぷっ。ぷく。ぷー。

ギルドの前で、間抜けなラッパの音とともに広げられた巨大な横断幕。そこに書かれた巨大文字。

その横断幕を高々と掲げるのは――

「おうタケル！ 俺が留守にしている間、おもしれえこと考えやがつて!!」

偉大なるギルドマスター、別名、暇ぶっこきおっさん。あなたどつかの町に出張中だと聞きましたが？ てか、誰だこのおっさんにチクったの。一番面倒で一番熱苦しいヤツじゃないか。

「グリットさん？」

「私じゃありませんよ！ 私はただ、勝負の内容をウェイドに相談ただけで……」

視線をウェイドに移すと、ウェイドは悪びれもせずニカッと笑ってサムズアップ。こいつか。

いつもなら依頼を受けたら即行で町を出てしまうはずの冒険者が、騒ぎを聞きつけてたくさん集まっていた。

顔見知りの上位冒険者から、気さくに挨拶してくれる下位ランク冒険者たち。ギルドマスターのお祭り好きの犠牲になったことで俺に同情してくれるギルド職員たち。屋台村や職人街といったベルカイン住人までいる。

完全なお祭りだ。

だから定期的に何か催し物をやれと領主に……言っておけば良かったな。

せめて大通りでバザーとか開催すりゃいいのに。他に娯楽がないばかりに、こんなくだらない勝

負さえ立派な娯楽になつてしまふ。

そうだ、もっと娯楽を増やせばいいんだよ。それこそ庶民が楽しめるような。奥様方の編み物大会とかどうだ？ 父ちゃんたちによる綱引き大会でもいいじゃないか。お子さんたちのパン食い競争とか。ベルカイン秋の運動会とか。

……領主に勧めてみるかな。

「よく逃げずに来られたもんだな！」

そう叫んで現れたのは、登場から小物感ばりばりのワイムス氏。

低ランク冒険者たちは露骨に嫌な顔をし、高ランク冒険者たちは冷めた顔をしている。どうやらこのワイムス、俺の想像以上に嫌われているんじゃないかなろうか。

そういえば、ペンドラス工房の可愛い猫耳リブさんも言つてたな。ランクB冒険者の素材採取専門家は仕事を選ぶことで有名なのだと。どうせ頼んだところで、貧乏工房の頼みなんて引き受けるわけがないと。だから、最低ランクでも指名依頼の多い俺に依頼してきたのだ。俺は大体の依頼は断らないから。

「聞いてんのか！」

何でも断らないとはいえ、とある若者から三軒隣の美人に懸想文を書いてくれないかと頼まれたときはさすがに断つたなあ。

代筆はできるが、恋愛小説家のような文章はとてもしゃないが書けない。愛する女性を花にたと

えたり星にたとえたりするんだろ？ 無理無理無理無理。恥ずかしい。そういう文章はそういう手紙を欲しがる女性に聞けばいいじゃないかと言ったら、彼は俺の言う通り知り合いの女性に相談したらしい。そしてその相談に乗ってくれた女性とお付き合いはじめたとか。なんだそれ。

「ビュイツ？」

頭の上にいたビーが俺の額を叩いた。

「ん？ ああ、はいはい。聞いてます。で、何？」

俺の返答にワイムスが超激怒。

「ふざけんじゃねえよ！」

朝っぱらから元氣いいなあ。

今朝の朝ごはんは肉厚のパンにバターと目玉焼き、とどめに醤油で楽しむつもりだったんだ。某アニメ映画で出てきた特製飯。それなのに、ギルドから突然呼び出されたせいで目玉焼きナシになったんだぞ。俺だって機嫌の一つくらい悪くなってもいいよな？

「ワイムスさん、また問題行動ですか？ 私、言いましたよね？ これ以上タケルさんに喧嘩を売るような真似をしたら、エウロパから除名処分もありうるよ」と

「だってコイツが！ 俺の話を！」

「貴方のつまらない挑発に乗らないだけでしょ？」

グリットも嫌気が差しているようだ。

ワイムスが慌てているのは、除名処分の話が出たため。一度冒険者の資格を失うと、一生再登録することはできないのだ。

「タケルさん、不愉快な思いをさせてしまつて申し訳ありません」

グリットが深々と頭を下げる。目をかけてくれている人にこんな真似させて、恥ずかしいと思わないのかね、ワイムス君。

そもそもなんで俺ばかり敵視するのかな。そりゃ指名依頼の顧客は俺に流れたかもしれないが、ランクB用の採取依頼はランクFとは比べられない。基本報酬ほうしやうだってランクBのほうがずっといいだろうし、俺に仕事を取られたといつても大したことはないと思う。それこそ、素材採取専門家は他にもいるのだから。

ギルドマスターのどかい声が狭くないギルドに響き渡る。

「よし！ それじゃあ勝負の内容を発表するぞ！」

その声を合図に、横断幕の隣に設置されていたボードがひっくり返される。そこには、見覚えのある美麗びれいな男の肖像画。

「うーん、うんつ、うんつ、では、及ばずながら俺が説明する」

なぜか赤い蝶ネクタイちようを締めたウェイドが、嬉しそうに差し棒を手にはボードを示す。

「今回の依頼はベルカイル領主、ルセウヴァツハ伯爵直々しききのご依頼だ！」

「「うおおおおお!!」」

なにしれつと参加してんだ、イケメン領主！

なにこれ領主公認なわけ？

ギルド公認どころか、領主公認!?

「最近までご病気で臥せておられた伯爵夫人が回復された話は聞いてるよな！ その麗しの奥方様を喜ばせるため、ルセウヴァッハ卿はレインボーシートの七色ウールをご所望だ!!」

「うおおおお!!」

なにそれ。

俺も隣にいたワイムスもキョトン顔。

良かった、彼も知らない素材で。

「真夏に抜け落ちるレインボーシートの毛だ！ こいつは期間限定の品だが、難題というわけでもない！ とても暖かく、それはそれは美しい毛らしいぞ！」

「うおおおお!!」

七色の抜け毛か。領主も妙なものを依頼したな。

レインボーシートがどんな動物なのかわからないが、名前からして凶悪な肉食動物ってことはないだろう。クレイに聞けば……聞いていいのかな。図書館で調べるのはあり？

「これはランク関係なく希少な品だ！ 知識と経験が必要となる！ ランクFのタケルが不利だが、テメェら、タケルの実力は知っているだろう？」

ギルドマスターがでかい声で皆を煽る。

「タケルの採取する月夜草は最高品質よ！」

「冒険者になる前にモンブランクラブを倒したのは、アイツなんだぜ！」

「うおおおお!!」

祭りに飢えていたヤツらは、ここぞとばかりに騒ぎ立てた。

娯楽ってほんとだいいじ。

不満や怒りというものは、定期的に発散しなければ鬱憤^{うつふん}となつて溜まるだけ。この世界の住人は今ある現状に不満はあれど、そういうものだからと素直に受け入れる傾向にある。現状に我慢できない者の多くは、冒険者となつて新天地を求める。そうして無駄に散っていった命はあまりにも多い。

「両者ともに異論はないか？ ワイムス」

「それらしき動物なら見たことがある！ 余裕だぜ！」

「タケルはどうだ」

問われ、さてどうするかと考える。

お肉が美味しいモンスター以外は興味がなかったから、ほとんど知識がない。生息地はもちろんのこと、どんな見た目のかもわからない。背後でクレイとブニさんが意気揚々と挙手をしているのは無視しておく。アイツら対象物を知っているな。

ここは確認のため聞いてみよう。

「ギルドマスター、質問」

「うん、何でも言ってみろ」

「対象物の生態を調べることは許容範囲内？」

「そうだな。知らねば探しようがねえだろう」

「誰かに聞くことは？」

「それはならねえ。採取家自身の知識と経験で戦うんだ。人に教えてもらっちゃ意味がねえかな」

「えっ」

今の「えっ」は俺じゃない。ワイムスだ。

愕然とした顔をしている。誰かに聞くつもりだったな。採取家自身のつてことは他人に頼るなつてことだろう。

「他に質問は」

「移動手段は徒歩？ 馬に乗るのは？」

背後の美人が素敵な笑顔で手を振っているから、一応聞いてやった。

「うむ……馬の性能で採取の速さが決まる場合もあるからな。乗り合いの馬車か、貸し馬ならば許そう」

背後の美人が膝をついて落ち込んだ。お気の毒。

すると、ワイムスが慌てて叫ぶんだ。

「今回はチーム戦じゃないからな！ え、栄誉の竜王やドラゴンの手伝いは禁止だろ！」

「当然だ。タケルもいいな？」

「もちろん」

俺自身が恩恵を受けている身だ。これ以上手助けがあつたら勝負にならないだろう。

仮に手助けしてもらうとすれば、クレイに生息地聞くだろ？ プニさんに乗ってモーレッツ滑走するだろ？ したくないけど。ビーに警戒してもらって採取。転移門で帰って終了。

だめだ、数十分で終わりそうだ。転移門を使うのもやめておくとするか。

それはともかく、領主の奥方様は順調に回復したようだな。

領主がなぜ奥方様に動物の抜け毛を贈ろうとしているのかはちょっと意味がわからないが、特別な思いがあるのだろう。

それならばより良質なものを探そう。時間がかかっても構わない。そうしていいもん見つけて、恩売って、また風呂に入らせてもらう。

勝負は……ついでで。

準備ができたところで、ギルドマスターが声を張り上げた。

「よおし！ それじゃあ行くぞ！ 期限は三日後の夕刻、陽が沈むまで！ 誰かに頼ったり金で解

決したりした時点で失格だ！ いいな！」

「うおおおお!!」

なんでこうなっちゃったんだろかと冷静にハニワ顔をしつつ、やる気満々で俺を睨みつけるワイムスに愛想笑い。

余裕があるわけではないが、勝負事というのは焦るとろくなことになる。やる気ばかりが空回りして盛大にコケた徒競走。可愛いあの子に笑われた鼻血と秋の空。

落ち着いて対策を練ろう。大丈夫だ。三日の猶予があるのだから。

「位置について！ よおー……いつ」

ふっふっふー。

3 開始・真剣勝負

素材採取勝負の火蓋は、間拔けなラッパの音で切られた。

ギルド前では、公然と賭けが繰り広げられている。評判は悪いが曲がりなりにもランクBのワイムスと、最低ランクで経験も浅いが腕は良いと言われている俺。オッズは……五分五分なのか。

俺に期待している人がいるのか。大穴だと思っていた。

俺は勝負の行方はどうでもいいと思っている。そもそも誰かと競うとか争うとか、そういうのはこりごりなのだ。ノルマノルマノルマの日々を思い出すじゃないかほんとやだ。

ただ、俺がめたくそに負けると、これまで俺を信頼してくれた人たちを不安にさせるだろうし、がっかりもさせる。なので、そんな人たちのためにも、精一杯の努力をしよう。

「さて」

「俺は先に行く！ 勝負はもうはじまっているんだからな。容赦はしないぜ！」

ワイムスは、わき目も振らず大門を目指して走っていった。彼はそれらしき動物を見たことがあると言っていたから、見当がついているのだろう。

俺はといえば大勢が見守る中、何か言いたくてうずうずしているクレイとプニさんを置いて通りを歩く。急ぐ必要はない。慌ててはいけない。

チームメイトの手助けは禁止されたから、会話は控えておこう。

「ピュイ」

「ドラゴンの言葉がわかることはバレないかもしれないが、それでも会話は最低限な」

「ピュイ……」

ビーは俺の見たものや知り得たものしか知らない。なので、レインボーシップも知らないだろう。人を頼らず、自分の経験と知識で戦う勝負。だが、先人の恩恵を受けるのはアリ。

そう、まずは行政区にある図書館に行くのだ。

知らないことは本を読み。前世ではそう教わったが、インターネットがあまりにも便利なため書物を開くことは滅多になかった。それに電子書籍つてありましてね。スマホでさくさく読めてしまうんだな。だから逆に、マデウスに来てから随分と読書家になった気がする。

図書館にはモンスターや動物の図鑑がたくさんあるから、きつとレインボーシープの情報もあると見込んでいるのだ。

「こんにちは」

ベルカイル図書館は広くて静かで清潔。町で一番落ち着ける場所。

何せほぼ人がいない。文字を読める人が少ないため、常に閑散かさんとしている。今日も人っ子一人いない。

「あら、タケルさん？ 今日はどうしたのよ。確かギルド公認の大会に出ると聞いたわ」

いつもいる受付の虎獣人、マイラさん。図書館の司書でもある。肉食な見た目に反してとても穏やかな性格の彼女は、この町では数少ない知的な会話ができる女性。

ギルド公認の大会つてのは、素材採取勝負のことだろう。マイラさんまで勝負のことを知っているのかと肩を落とす。

「その、大会（？）中なんです。レインボーシープについて知りたいので、動物図鑑を読ませてください」

「まあそうなの？ それじゃあ頑張らなさい」

「ありがとうございます」

週に二、三回は訪れている癒いよしの空間。この図書館が収蔵しているすべての本は歴代のルセウヴァツハ領主が趣味で収集したもの。趣味で本を集めて立派な図書館にしてしまうんだから、金持ちつてすごい。

ちなみに、俺は領主のコネで閲覧料は常に無料。ただし、面白そうな本があったら報告しろと言われている。

「ビューイ」

「名前から察するに草食動物だと思うんだが、どうだろうな」

図鑑などが集められた棚に近づき、さてどうしたものかと考える。

動物図鑑はデカイ上に頁数が膨大だ。貴重な文献だから手荒に扱うわけにはいかない。おまけに名前順ではなく完全にランダムに記載されているから、探すのは一苦労。

棚から図鑑を数冊取り出して机の上に並べる。

最新版の図鑑でも、製本された日付は五年前。本を作る方法なんて知らないが、この世界では印刷機でペペッと簡単に作れるわけではないということとは理解できる。

さて、本について考えている場合ではない。俺には探査能力サウチがある。何かを探し出す能力だ。だが、俺がこうしたいと思いつかなければ宝の持ち腐れ。猫型ロボットの不思議道具のように便利なのだが、どう使うかを思いつかなければすべて無意味になる。



膨大な情報量の中から必要な情報だけを取り出す。そんな魔法はと、うーん、専門的すぎて頭が痛くなる。

難しいことを考える必要はないんだよ。
もっと簡単に、単純に考えればいいんだ。

「レインボーシープと七色ウール、この二つの文字が書かれてある本が欲しい。そうだよ、その単語を探せばいいんだ」

閃いたらあとは簡単。本の前で探査の応用。特定の単語だけを探し出す魔法。

「レインボーシープ、七色ウール、検索！」

イメージはパソコンのショートカットキー、Ctrl+Fだ。膨大な文字から探したい単語だけを抽出してくれる便利機能。

相変わらず地味な魔法だが、上手く発動したようで分厚い図鑑のいくつかがほのかに光りだした。淡いピンク色が示す図鑑を手に取り、光が濃く瞬く頁を開く。

【レインボーシープ ランクD エプ目エプ科シープ亜種】

アモフェル草を好んで食べる草食動物。

性格は大人しく、群れで行動する。柔らかな弾力性のある毛を纏い、寒さの厳しい地でも生息できる。

夏に抜け落ちる毛は七色ウールと呼ばれ、毛糸として加工可能。編み込んだ服は防寒具として重宝^{ちゆうほう}される。

「備考」臆病^{おくびょう}であり、わずかな音にも警戒するため近づくことは困難。抜け落ちた毛は他の動物の巢材^{すざい}として利用されることが多い。希少。

「よし！ 成功だ！」

「ビュイ！」

「えーっと、確かアモフェル草っていうのは、寒冷地に生える黄色い草だったよな」

採取したことはないが、乾燥させたアモフェル草がトルミ村の倉庫に保管してあるのを見たことがある。冬場になるとあちこちに生えてくるから駆除するのが大変なんだ、と村人が言っていた。寒さに強く、どこでも容赦なく生えてくるらしい。馬などの家畜に食べさせる、と。

寒い時期は普通枯れるよな、って思いながら聞いていたから覚えていたんだ。

今は夏。日本の灼熱^{しゃくねつ}地獄よりずっと過ごしやすい気候だが、日中はそこそこ暑くなる。

アモフェル草が生えていそうな寒いところとなると……例えば、標高の高い場所かな。レインボーシープもそこに生息している可能性が高い。

「地図、地図地図地図！」

領主の家で見せてもらったルセウヴァツハ領の地図を必死に思い起こす。

高い山はイルドラ石を採掘しに行ったリュハイ山脈以外だと、南西のトルワナ山。富士山のよ^りうな独立峰で、神様が地面をつまんで作り上げたと言われている^{れいほう}霊峰。

今の季節、気温が低そうな高地といえ、ルセウヴァツハ領内ではそこだけだ。

「ビュイ？」

「行ってみるしかないな」

確認のため、トルワナ山までの道のりが詳細に描かれた地図を記憶^{りいど}する。

ざっと見たところ、徒歩で一日くらいか。距離でいえば、大体二、三十キロ。乗馬は遠慮したいから走っていくとして、俺のウカレランニング^{むぎ}無双だと数時間くらいだ。ちよつと本気で走れば、もっと早いかもしれない。

装備、このままでヨシ！

食料、気に入ったものは大量に大人買いしてある！

風呂、は我慢する！

勝負がはじまってすでに一時間近く経過。

どうしても焦ってしまう気持ちを抑え、マイラさんに礼を言つて図書館をあとしした。

泣きじゃくるビーをプニさんに預け、南西に向けてドルト街道をランニング。浮かれると目的地がわからなくなるため、ツンと尖った高い山を目印にひたすら走る。

俺の大体の感覚だが、リュハイ山脈の標高は富士山よりずっと高かったと思う。だが、今遠くに見えている霊峰トコルワナも容赦なく高い。

青い空に突き刺すように聳え立つ山は、白い雪で身を半分以上隠し、来る者すべてを拒むような岩々でその形を成している。随分と環境は厳しそうだが、草木が生息できる範囲を探せばいいはず。ギルドが出したお題だ。あるのかどうかわからないようなものではないだろう。あるはずだから見つけてねよろしく、という感覚で間違っていないはずだ。

もしもボルさんの棲処やプニさんの湖みたいに魔素停滞の影響が出ていたとしたら……と考えるとすぐにやめる。そんな可能性、考え出したらキリがない。

「見つけたっ！」

ともかく俺は久しぶりの単独行動。

いつも頭や肩にあつた生臭さがないだけで不安を感じてしまうのは、それだけビーがいつもそばにいたという証。俺とかなかなか離れたがらなかったビーを無理やり引き剥がしたのはプニさんであり、なぜか笑顔で「魔力はわたくしが補ってあげます」と言われた。

用事はさっさと済ませて帰るつもりだが、それでもまる一日か二日は離れたままだろう。大丈夫かな。泣きすぎて頭イタイとか言っていないかな。

「あのーっ！」

それともやけ食いかしていないだろうな！ ビーは可愛いから、あっちこちでおやつをもらう。それを調子こいて延々と食うもんだから、いざ夕飯のときになつて腹いっぱいだとかぬかしやがる。子供か。子供だったか。

食べる姿がちょっとハムスターみたいで可愛いのはわかる。わかるがしかし、メタボドラゴンなんてそんなの……

ちよつと見てみたい気もする。

「ちよつと！」

それもまた可愛いんだよなちつきしよう、って思っている時点で俺って親バカなんだなあと。同僚が赤ん坊を自慢する気持ち、今さらながら理解できたよ。鬱陶しいとか思つてごめんよ田中君。君の気持ち、今ならわかる。写メりたい。

「ちよつとー!?」